

令和6年度未来を創る学力向上支援事業に係る第1回学力向上検証会議

【目的】令和6年度大分県学力定着状況調査及び全国学力・学習状況調査の結果等をもとに、課題解決に向けた取組について、各市町村学校教育主管課長等と協議し、今後の施策の改善充実を図ることで、本県の児童生徒の学力向上に資する。

【期日】令和6年9月25日（水） 13:30～16:00

【会場】大分県教育センター 講堂

1. 開会行事

＜挨拶＞教育次長 武野 太

平成25年の第1回目から今年で12年目の開催となった。この12年間で教育を取り巻く環境は大きく変わった。児童数が約1割減少、不登校の児童生徒は全国で約30万人。特別支援教育においても課題がある。また全国的に、教員採用試験の倍率が低下しており、大分県も同様の状況である。

本日の協議内容1つ目は、良い授業のイメージを共有するために教育委員会としてどのように取り組んでいくか。2つ目は、校内研修を効果的なOJTの場として教員の指導力向上のためにどのように働きかけていくか。また、教育施策を行っていく際には、指導主事の役割が大きい。

協議の1つ目については、どのような施策を行っていくかということに加えて、指導主事の職務は、大きく分けて3つある。1つ目、学習指導、生徒指導に対する指導・助言。2つ目、教育政策の企画立案。3つ目、学校経営の支援。学校訪問時の指導の観点では、田村学先生（文部科学省主任視学官）の学校への指導助言は秀逸であると考えられる。手法は主催者の研究のテーマや講評する視点に沿って予めフレームを作成。そのフレームの中に入れて込んでいって指導・助言をしている。教師や子どもの発言、子どもの表情、写真などを入れて見える化をし、分かりやすく先生方に伝えている。話の骨格を作っておいて伝えるとわかりやすい。田村先生のお話は価値付けだけでなく、今後どのようなことをすれば良いかという方向性も示してくれている。今後つべき良い授業のイメージをもたせてくれる。学校は、指導主事が来ることを期待していると思うので、学校が来てくれてよかったと思えるような指導・助言をお願いしたい。

協議の2つ目について。自分自身が新採用の時に、学校研究の歩みという冊子を活用していた。表には学校研究とは、研修、研究とは何かということが書かれている。研究指定校ではなかったが、全員で授業展開例を考えるなど、当時も「協働」という言葉がたくさん使われている。学校で全員が協働することで若い先生方も成長し、先生方の学びにつながる。今後、さらに子どもたちの豊かな学びにつながっていくのではないかと。

2. 説明

「令和6年度大分県学力定着状況調査の結果全国学力・学習状況調査の結果等について」

大分県教育庁義務教育課 学力向上支援班 課長補佐 瀧口 忍

(1) 説明

- 偏差値の5段階分布と低学力層の推移
 - ・評価規準C（段階1と2）小学校では標準程度、中学校では英語については段階2のところ34%である。
- 令和6年度全国学力・学習状況調査結果
 - ・中学校数学は、全国平均を下回り課題が見られる。
- 令和6年度全国学力・学習状況調査 全国平均正答率との差の推移
 - ・大分県は調査開始時には課題があったが、先生方が課題を捉え、授業改善を推進してくれていることにより改善が見られる。
- 令和6年度全国学力・学習状況調査 平均正答率の分布一覧



- ・低学力層の割合40%以下の児童生徒 県調査同様に中学校の低学力層の割合が全国値より高い。
- 大分県学力定着状況調査 質問紙調査結果推移（勉強が好き）（勉強がわかる）
 - ・昨年から横ばい、上昇の傾向である。
- 令和6年度全国学力・学習状況調査 児童生徒質問調査の結果
 - 「国語、算数・数学」（勉強が好き）（授業の内容はよく分かる）
 - ・小学校はいずれも全国値よりも高い。中学校の数学の「授業の内容はよく分かる」は全国値を下回る。
 - 「授業改善」
 - ・いずれも全国値よりも高い数値である。
 - 「キャリア教育関係」
 - ・いずれも全国値よりも高い結果である。キャリアノートの活用や中学校では地域と連携したキャリア教育の推進の取組の効果である。
- 令和6年度全国学力・学習状況調査 学校質問調査の結果
 - 「学校組織、授業改善」
 - ・いずれも高い結果である。
 - 「ICT活用関係」
 - ・年々上昇している。端末の使用に児童生徒も慣れてきている。
- 大分県学力定着状況調査 質問紙調査結果から見える授業改善の現状
 - 新大分スタンダードに基づいた授業改善について
 - 「友だちの意見を聞いて、新しいことに気づいたり、自分の考えが深められたりして、勉強って面白いと思いますか。」
 - ・若干低い数値である。主体的・対話的で深い学びが実現する授業改善をお願いしたい。対話の目的は何か。何のために交流するのか。しっかり、目的をもたせることが大切である。
- 大分県学力定着状況調査 質問紙調査結果から見える学習習慣の現状
 - 「スクリーンタイムの時間」
 - ・平日に3時間くらいから4時間以上が小学校33.8%・中学校47.4%である。
 - 家庭学習が十分できていないことが考えられる。睡眠時間の確保も十分でないことも考えられる。
- 大分県学力定着状況調査 質問紙調査結果から見える規範意識の現状
 - 「学級の規範意識」
 - ・全国と大分県の差はない。しかし、小中学校半数近くの割合で「授業に集中できない」と回答しており、課題として捉えることができる。授業改善を進めていくには学習環境を整えることが重要である。
- (2) 結果分析
 - 「学力調査結果から見える現状」
 - ・低学力層の割合を減らす授業改善を進めることがこれからも重要である。
 - 「質問紙調査結果から見える現状」
 - ・「授業の内容がよくわかる」に対する肯定的回答の割合が減少していることから、小・中学校の学びのつながりを意識した授業改善に取り組む必要がある。
- (3) 今後の取組
 - ・中学校の学力向上において未来を創る授業力向上協議会の積極的な参加をお願いしたい。各市町村で共有をして授業改善に活かしてほしい。
- (4) 中学校における授業改善の推進
 - ・「数学教員向けワンポイント動画」「中学校英語教員指導力向上授業動画」の活用をお願いしたい。
- (5) 令和6年度未来を創る学力向上支援事業について

・今回の検証会議も位置付けている。これからの改善につなげていきたい。

3. 【協議】各市町村における授業力向上の取組の充実に向けて

〈司会・進行〉大分県教育庁義務教育課 参事 山川 明宏

協議1「良い授業のイメージ」を共有するために教育委員会としてどのようなことに取り組んでいるか
(今後、取り組んでいくか)

<ul style="list-style-type: none"> ・3つの柱の設定～付けたい力、評価規準の明確化、読解から表現につなぐ力の育成、必然性のあるペア・グループ活動。リーフレットで周知。研究指定校を設けて進めている。(佐伯市) ・研究指定校を指定し公開していただく。4月から継続的に指導主事が指導・助言を行っている。今年から、若手教員育成のために授業力向上アドバイザーを活用している。(別府市) ・一人一実践指導案集を作成。若手が指導案を市の共有フォルダから見られるようにしている。市教委が「宇佐小・中授業の流れシート」「授業の実践動画」を作成。市教委と学力向上推進支援チームが連携して取り組んでいる。(宇佐市) ・公開授業の実施。年間公開回数を増やしたが、参観者減少になることが課題である。日頃行われている校内研を見ていただく機会をつくった。町教研の公開とも兼ねる。(日出町) <p>(小野課長) 研究指定校の情報公開をどうしているか。 →広めるために年1回公開研究発表会において各学校1名参加。共同研究(学校と学校をつないで広めていく)佐伯小が中心となって2つの小学校(連携校)が時間を工夫しながら参加。(佐伯市) →令和元年より「みんな活躍授業」スタートし、令和5年より推進校を指定し公開授業を行う。若手対象にした「授業づくり研修会」は若手がヒントをもらう機会になっている。指導主事がオンラインにて年10回スキルアップ研修を実施。(中津市)</p>
--

協議2 校内研修を効果的なOJTの場とし、教員の指導力を向上させるために、教育委員会としてどのように働きかけていくか。

<p>1 グループ (中津市、宇佐市、大分市、附属中)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・若手をどう育てるかを焦点にしている。管理職と協働的に取り組んでいる。 ・研修のポイントを事前に周知し、準備をしていただく。 ・若手の見取りや定着が課題である。 ・実習生が生徒に対する指導に難しさを感じており、学級経営力を身に付ける必要がある。(附属中)
<p>2 グループ (日田市、別府市、佐伯市)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・人材育成のため、市教委が中心となってヤングリーダーを養成している。 ・若手を校内研で活かすために、板書にまとめさせて、振り返りをさせることで意欲を高めていく取組をしている。 ・オンラインで各学校の校内研修担当者同士が情報共有を行っている。 ・一人一実践の取組をフォルダで共有。 ・中学校において校内研修が深まらないことが課題。
<p>3 グループ (豊後高田市、豊後大野市、臼杵市)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教育委員会から視点や方針を示す。(子どもの姿で語るように) ・核となる先生にミッションを与え、校内で組織的に機能できるようにする。 ・一校で研修・研究を閉じずに、互いに学校で意図をもって見合える機会をつくる。見る機会を提供していく。
<p>4 グループ (竹田市、杵築市、由布市)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・研究主任会、校長会において市として全員が再確認する場をもつ。 ・授業力向上アドバイザーを必要に応じて活用していただく。 ・研究主任会において、校内研をより充実させるため熟議。 ・各学校のテーマのニーズに合った支援を行う。
<p>5 グループ (国東市、日出町、九重町)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・どのような授業づくりをするか指針や方策を示す。 ・校長、教頭、研究主任を集めて指導改善の重点を示す。 ・研究主任、教務主任がOJTを推進することで指針や方策がぶれないような体制をとる。
<p>6 グループ (津久見市、)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全学校の校内研を公開することで校内研を活性化させる。 ・附属小・中の公開研に参加させ人材育成につなげている。

<p>玖珠町、附属小)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研の授業の意見をチャットグループで共有する。 ・学級経営の基本は特別活動とし公開している。(附属小) ・学校規模に関係なく研究を進める。横の連携を大切にしていく。
-----------------	--

まとめ 大分県教育庁義務教育課 課長 小野 勇一

- ・OJTは民間企業等と異なり学校現場において非常に機能しにくいものである。

※資料を参考にしながら (H27プロジェクト会議)

- ・校内研究が非常に大切であることが示されている
 - 組織的な校内研究や地区の教科部会の充実が大切であること。
 - 校長や主要主任、市教委からの指導の充実が大切であること。
- ・互見授業は大切である。授業力を高めるために授業を見る機会を増やすこと。(授業を見る・見てもらおう)
- ・教科等横断的なグループ編成をすることは大切。
 杵築市宗近中学校の取組～若年層授業力向上研修(若年層・ベテラン教諭が組んで授業研究会を行う)すべての先生は年間5回互見授業 個人実践発表会→課題に応じた取組
- ・OJTを機能させるためには管理職の方々の力が必要である。それを支えていくのが教育委員会の役割である。



4. 指導講評

<指導助言> 大分大学名誉教授 山崎 清男 氏

- ・間違いなく大分県の学力向上の取組の成果は出ている。
- ・大分県らしさ、市町村らしさをどう出すがこれからの課題である。
- ・授業の中身が社会の変化から変わってきている。
- ・「経験教育論」生活経験を大切にすあまり、(ティーチング)が軽視されている。活動という手段が目的になり学力低下に陥った。理論を日頃のベースとして授業改善を進めることが大切ではないか。
- ・授業と家庭学習について
 - 「制限コード」物事を主観的にみる→力で押さえつけること。
 - 「精密コード」物事を客観的にみる→説明をして相手に納得させる。学校・家庭でもこの考えを。
- ・「次にどうするか」の視点で大分らしさを探っていただきたい。

